

# 秋の音色を楽しんでほしい

岩手スズムシ飼育愛好会会長

## 菊池悦郎さん

「リーン、リーン、リリン、リリン、リーン」…スズムシの奏でる音色が、秋のさわやかな風を誘っています。

9月5日、菊池悦郎さんと愛好会会員の大村さん(盛岡市)、佐藤さん(奥州市)は、散策しながら秋の風物詩を楽しんでもらおうと、詩歌の森公園の一角に幼虫、成虫合わせて1000匹余りのスズムシを放虫しました。

自らが愛情を込めて育ててきたスズムシを会員たちと放つようになったのは、平成12年8月からのこと。同公園は



詩歌の森公園内の山口青邨宅・雑草園の庭に、会員と伊藤市長らと一緒に放ちました



鈴虫の音色着に秋を酌む  
菊池さんの詠む川柳にもスズムシへの愛情が感じられます

市街地にありながら、池の造成や植樹などで自然を模した庭園となっており、市民の憩いの場となっています。

この公園を「スズムシのすみ里」にしたいとの願いから、放虫を続けてきてちょうど10年目を迎え、放つたスズムシは1万匹を超えました。

しかし、ムクドリやカラスなどの野鳥や外敵も多く、なかなか定着しないのが悩みだといえます。

元教員で理科を教えていた

菊池さんは「奏でる虫の中ではスズムシが最高。理科を教えていた当時に教材としたこともあったから、スズムシとの付き合いは40年以上かな。これからも愛情込めて育てていきますよ」と話します。

公園内にそよぐさわやかな秋風の中、スズムシが奏でる美しい音色は、心穏やかにさせる不思議な魅力があります。菊池さんは「スズムシのすみ里」の夢実現に向け、今もスズムシと語っています。

## 数字に見る北上 ⑨

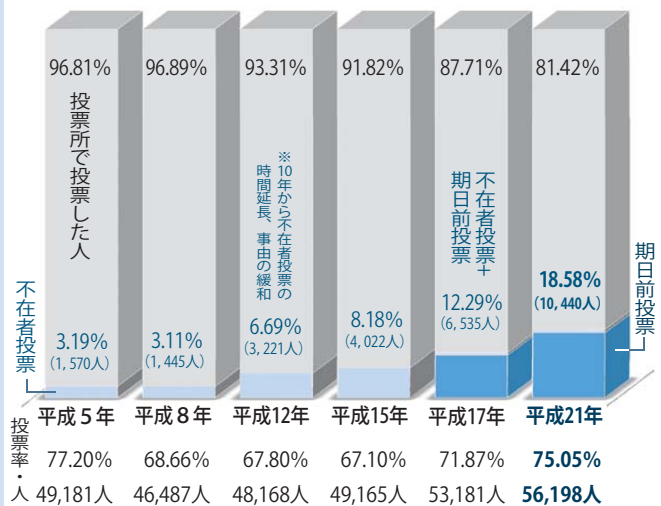
8月30日に執行された第45回衆議院議員総選挙(小選挙区)で投票した人の内、期日前と不在者投票をした人の割合です。これは投票者100人の内およそ19人、2割の人が投票日以前に投票を済ませたこととなります。前回の衆議院議員選挙(17年執行)と比較して6.29ポイント上回りました。

期日前投票は執行日(投票日)に投票に行けない人のために、公示・告示日の翌日から投票日の前日までの期間に投票できる制度で、15年12月に設けられ、16年の市議会議員選挙から実施されました。

不在者投票は、投票用紙を専用の封筒に入れ署名をしなければなりません。この制度はそのまま投票箱へ投入することができ、比較的投票に参加しやすくなったことから少しずつ定着してきています。

18.58%

衆議院総選挙(小選挙区)で投票した人の内  
不在者・期日前投票をした人の割合



この数字?





中央図書館 ☎ 63-3359  
江釣子図書館 ☎ 77-2215  
和賀図書館 ☎ 72-2322

ザグドガ森のおばけたち やえがし なおこ  
ホネホネどうぶつえん 松田 素子  
よかったなあ、かあちゃん 西本 鶏介  
プロゴルファー石川遼 井上 兼行  
日本人が意外と知らないにほんの話  
親が教える！小学生の作文上達法  
樋口 裕一  
端切れ10cmから始める1時間雑貨  
休日は麺。 渡辺 有子  
流星さがし 柴田 よしき

《9月の新着本から》



『なんのいろ あき』  
ビーゲン・セン 作  
永井 郁子 絵  
リブリオ出版  
色遊びを楽しみながら色への関心を高めていく絵本。



『プリズン・トリック』  
遠藤 武文 著  
講談社  
刑務所内での密室殺人を描いた社会派推理小説。第55回江戸川乱歩賞受賞作品。

きたかみ物産館



無農薬・ノンカフェインの健康茶  
更木桑茶

桑茶(100g) : 1,000円  
桑茶パウダー(60g) : 1,000円

更木ふるさと興社



更木22-9-2  
☎81-6136



小田島 弘子 さん

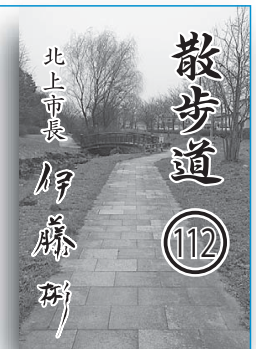
更木産の桑葉100%使用  
今年7月から操業開始しました。桑葉にはカルシウムやカリウム、鉄、亜鉛などのミネラルが豊富に含まれています。無農薬栽培の桑葉から茶葉とパウダーの2種類を生産。パウダーはお湯に溶かしてお茶としても、料理に加えてもおいしくいただけます。  
市内12店舗で販売中。市内の業者と連携し、新しい特産品を開発中です。

桑茶工場スタート

更木地区の桑茶の工場の落成式に招待された。地域の皆さんが豆腐に続き、産業を興しさらに地域らしい商品(名物)の創出を考えた。まさに最近各地で取り組まれている農工商連携のチャレンジ第2弾である。

やわらかく癖のない濃緑の桑茶を試飲しながら、思いは少年時代にタイムスリップした。「こらっつ、木に登るな」畑のおじさんの大きな怒声に慌てて逃げる。

初夏、紫黒色に色付いた甘い桑の実(カゴ)を食べたくて近所のカギどもはおじさんに怒られるのを承知で、桑の木に登っては大事なお蚕さん用の桑の葉を痛めた。桑の実を食べると口の周りは紫色になっているから家に帰ってはまた怒られる。



散歩道

112

た。おやつも甘味も少ない時代だから、桑の実やアケビ、シヤゴミ、スグリは少年たちにとっては野山からの贈り物と思っていた。

小学校の帰り道、今は目にするでもない絹糸紡ぎの作業場があり、飽きもせず見ていた。絹の市場は化学繊維に押されて産業も細り、桑畑も目にするのが少なくなつた。

更木の人たちは桑畑の再生の発想からお茶の製造を研究し、実現に至つたという。極めて健康に良いことは科学的に立証されている。産業としても発展が大いに期待できると指導した大学の先生が激励してくれた。

小さな地域で地域の人々の手で始まつた産業。順調に発展し、農地も美しく保たれた郊外らしい風景の中で、穏やかな日差しとさわやかな風の中で楽しく桑茶談義をする人々の笑顔を想像した。

